

森を心底愛する手から生み出される 木々の息遣いが聞こえる、器や箱たち

神奈川
田澤 祐介さん



田澤祐介さんの作品を眺めると、木々の息遣いが聞こえてくるよう。表情が生き生きとし、清々しさを感じる。そう、太陽の光が差しこむ朝の澄みきった空気の中で、凜としたたずむ森を思い出す。大学で林学を学び、卒業後、日本各地の森で自然環境調査をしていた田澤さん。「製材した木を見ると、森で生きていた状態が目に見えます。例えば、アズキナシ。自分が森で見たのは、細い木ばかりだったのに、製材したアズキナシを見ると、とても大きい。こんなに大きくなるんだと感慨にふけったり。家具でよく使うナラやタモは、近頃、海外の材が増えて、日本の森林は大丈夫かと心配になったり。生態系が透けて見える分、木をより大事にしたい。なるべく、無駄をなくすようにしています」。製材した木をモノとして見るのではなく、森で生きていた状態で向き合い、会話しながらつくっていくのだという。森が好きで、森林を知ってもらおう手段として木工を始めた田澤さんの強い想いを感じる。

*

シンプルで、洗練されたフォルムのトレイや皿。表面をのみで削り、極限の薄さに挑戦している。「薄くしすぎると強度が弱くなりますので、強度を保ちながら、薄く軽くできるような攻めてます(笑)」。シャープさを漂わせながらも、削り出した手と木の温もりが滲み出て、おむすびをのせるだけで絵になるから不思議。

「何でものせて下さいね。油ものだった大丈夫ですよ。逆に、いい具合に油がついて味が出るんです」。お手入れも、クルミの実をつぶしたものを布にくるんで拭くだけでも随分違うのだとか。

田澤さんの魅力は、器だけでなく、箱ものもきっちりつくれること。お箸やカトラリーを入れる細長い箱、茶道具やコーヒーや紅茶などのお茶セットを入れることができる大きめの箱、そして、名刺サイズの小箱まで幅広い。大工道具の勉強会で、指物的なものづくりを勉強しているだけに、仕事がとても丁寧で、きちんと感がある。蓋を開けると、蓋の裏側が丁寧に削られていた。「二つは、蓋を軽くするため。そしてもう一つの理由は、使っている部屋の空気が乾燥すると、蓋が反ってきてしまうので、反りにくくするための予防でもあるんです」。補強のためのかんざしもワンポイントデザインとして効いている。箱の大きさをオーダーできるのもうれしい。その他、小さな机がわりにもなる大きめの入れ子膳も風情がある。気心が知れた人とお茶やお酒を酌み交わすのに良さそうだ。

ろうそくのあかりのように、暮らしや心がほわっと温かくなる木の器や箱たち。「器や箱などを使ってもらうことで、少しでも日本の森林のことを想ってもらえたら」。意識は常に森と繋がっている。田澤さんの作品を通して、木々の息遣いに耳を傾け、日本の森へ想いを巡らしてみたい。

十三夜ウェブマガジンより転載



yusuke tazawa
1970年神奈川県横浜市生まれ。大学で林業や森林について学んだ後、1995年に自然環境を調査する会社に就職。調査で日本各地を廻る中、さまざまな森や木に出会う。退職後、木工を志し2002年に森林たくみ塾へ入塾。2004年に卒業後、中古北欧家具店での勤務を経て2006年独立。